

〈三周年へのメッセージ〉

「介護退職ゼロ作戦」

応援団 樋口 恵子

男性介護者が増えた
三年前ネットワークが生まれ
男性介護者が語りはじめた
いろいろなことがわかった
男がその存在理由としてきた仕事を
介護は容赦なく奪う、ということ。
中堅管理職にたどりついたミスターA
定年退職金が楽しみだったミスターB
資金繰りして店開きしたミスターC
中高年男子のささやかな未来を、介護は断ち切る
なんと多くのものが失われることか
男たちは自分の老いへの貯蓄と年金を
会社は長年投じた人材養成費とベテラン社員の能力を
そして国と自治体は、多額の所得税を、社会保険料の財源を。
この年齢のサラリーマン男性が国の財政を背負ってきたことを忘れてはならない。
本人と職場と国と自治体と保険団体と。四方大損の介護離職

育児家事の延長線で介護を女が一身に背負っていたころ、男は見て見ぬふりで言った。

「だって、仕事があるもの」

介護量の激増と担い手家族の少子化で、介護の男性化がすすんだ

仕事を失い、慣れぬ家事介護、突然の孤立。

立ちすくむ男たちが、歩き出し語りはじめたとき世の中は気づく

膨大な数の女たち、介護を担う女たちも

男たちと同じものを失ってきたことを

男たちが介護から語るとき、世の中が変わる。

さあ、男も女も、介護退職ゼロ作戦

介護と仕事両立社会へ。

男たちと同じように女も仕事と、社会とともに生きる

介護する人が幸せでなかったら

介護される人もしあわせになれません。